

2022/1/16

ヨハネの手紙第一 講解メッセージ⑧

『二つの罪』 I ヨハネ 2:29-3:6

■義を行う者

「もしあなたがたが、神は正しい方であると知っているなら、義を行う者がみな神から生まれたこともわかるはずですよ。」（I ヨハネ 2:29）

「義を行う」とは、何でしょうか。聖書のことばは聖書のことばで解釈するというのがプロテスタントの大原則です。ですから御言葉の意味を知りたいと思ったら、まず他の聖書箇所ではどのように説明しているのかを調べてみましょう。宗教改革以前の問題は、御言葉の解釈に世の中の権威を取り入れてしまったところにあります。そのため聖書の理解が混乱してしまったのです。

では、「義を行う」ということについて、聖書はどのように説明しているのでしょうか。

「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとはパリサイ人で、もうひとは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるる者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。」（ルカ 18:10-14）

このパリサイ人は、不正を働かず、週に2度断食して祈り、十分の一をきちんと神に捧げていました。大変立派な行いです。通常私たちは「義を行う」とはこのような行いをするのだらうと考えがちです。ところが、イエス・キリストは、神の前に義と認められたのは、このパリサイ人ではなく取税人のほうだとはっきり述べておられます。

つまり、「義を行う」とは良い行いをするのではなく、自分の罪を言い表し神の憐れみを受けることです。医者の中で自分の具合の悪いところを言い表して治療を受ける者のように、神の前に重荷を告白してそれを取り除いてもらうことなのです。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちがありません。」（I ヨハネ 1:9-10）

聖書は、神から生まれた者は良い行いができるようになると教えてはいません。ただ、罪を自覚し、言い表すようになると教えています。これが義なのです。

■今私たちは神の子どもです

「私たちが神の子どもと呼ばれるために、——事実、いま私たちは神の子どもです——御父はどんなに素晴らしい愛を与えてくださったことでしょうか。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。」（Iヨハネ3:1）

私たちは良い行いをしたらその報いとして神の子にしてもらえるのではなく、すでに神の子とされています。それが可能になったのは、御父が私たちに素晴らしい愛を与えてくださったからです。それはイエス・キリストです。イエス・キリストが私たちのために地上に生まれ、私たちを捉えてくださったから、私たちは神の子として神とつながることができるようになったのです。これが永遠のいのちを持つということです。

「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」（Iヨハネ3:2）

今神の子どもであるということは、私たちの将来はキリストと似た者になる、つまり復活することが確定しています。

流れる時の中で、私たちは「今」を持つことができません。「今」を捉えたと思った瞬間、それはすでに「過去」になっているからです。「今」が確定しなければ、過去と未来も確定せず、不安定なままです。これが、私たちが不安を覚える原因です。この地上で今を持つためには不動のものをつかむ必要があります。それはイエス・キリストです。イエス・キリストを持つ者は今を持つことができ、キリストが示された過去と未来を確定させることができます。それは赦された過去と復活する未来です。

イエス・キリストを持つ者は今を持つことができ、イエス・キリストが示された過去と未来が確定します。キリストと同じになるのです。これがキリストと共に十字架につけられて死ぬということなのです。キリストと共に古い自分は死に、私たちはキリストと共に生きる者となりました。イエス様が十字架で示してくださった過去と未来が確定したのです。今までは確定していなかったため、過去に犯した罪が罪責感となって、「お前は悪いやつだから愛されるはずはない」と私たちを脅してきました。しかしイエス・キリストを持った瞬間、過去は「赦された過去」に確定したのです。そして私たちの未来も、霊のからだをもってよみがえり神の国でイエス様を見ることが出来る未来に確定しました。これがキリストと似た者になるということです。

私たちがこの事実にとどまることが信仰です。過去は赦され、未来は復活するという事実にとどまることです。

「キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」(Iヨハネ 3:3)

私たちはすでに神の子という未来が確定しているので、神の子どもらしく生きましようとして聖書は勧めています。神の子が罪を犯すことはありません。しかし、現実の私たちはまだ死の体を持っていて罪を犯します。そんな私たちに神は、罪を言い表して健康を取り戻しなさいと言っておられるのです。病気になったらいやしてもらえばよいのです。

■単数形の罪

「罪を犯している者はみな、不法を行っているのです。罪とは律法に逆らうことなのです。」(Iヨハネ 3:4)

神の律法の第一は「神を愛しなさい」です。それは神を信頼することですから、律法に逆らうとは「神を信じないこと」です。そしてギリシャ語の原文では、この場合の「罪」は単数形で書かれています。それに対して、「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(Iヨハネ 1:9) の場合の「罪」は複数形で書かれています。日本語ではどちらも「罪」と訳されていますが、単数形と複数形では示すものが大きく異なります。

「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。」(ヨハネ 16:9)

この場合の「罪」も単数形で、神を信じないことを指しています。

私たちが神を信じられないのは、神と分離しているからです。つまり、罪とは神と分離した状態なのです。この状態を死と言います。私たちは有限性になったため永遠なる神が見えなくなり、信じられなくなりました。

罪とは、私たちの中に神と分離する運動が入り込んだことであり、その実体は死です。神と死は無縁の存在です。死は神との隔ての壁です。この分離の状態ゆえに私たちは神を信じられないのです。

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」(Iコリント 15:56)

原語では「罪 死のとげ」と書いてあるだけで動詞がありません。これはギリシャ語の強調を表す表現で、格言的な言い回しです。つまり「罪は死のとげだ」という意味で、罪とは死によってもたらされた状態、分離された状態を強調して表しています。罪によって死のと

げが入ったという意味ではありません。それは、ローマ 5:12 の「死が入り込んで罪が私たちのうちに住み着いた」という内容からも明らかです。

ですから、聖書の中で単数形の「罪」は、分離であり死を表しています。私たちの中に死が入り込んだために人は皆、死の恐怖の奴隷になりました。神のいのちを持ち神を知っているのに認めることができない、これが私たちの不安の根本原因です。この不安を取り除こうとして私たちは見える安心をむさぼって生きています。この罪の行為については、聖書では「罪」という言葉の複数形で表して区別しています。つまり、罪の行為は罪から生じているということです。ですから、「罪を犯している者はみな、不法を行っているのです。罪とは律法に逆らうことなのです」（I ヨハネ 3:4）とは、「キリストを否定している者は皆、不法を行っているのです。罪とはキリストを否定することなのです。」という意味になります。

■複数形の罪が示すもの

「キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。キリストには何の罪もありません。だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。」（I ヨハネ 3:5-6）

ここでは、最初の「罪」だけが複数形で「罪の行い」を指しており、後半の「罪」はすべて単数形で、「神を信じないこと」すなわち「キリストを否定すること」を表しています。つまり、神と分離された不安によって行っている罪の行為に関してはキリストが取り除いてくださるし、神を信じない罪に関しては、イエス・キリストにとどまる者は神を否定することはできないので、罪を犯すことはできないと言われているのです。キリストは父なる神と一つですから、キリストが父なる神を否定することはあり得ません。つまり、イエス・キリストは罪のない方です。そのイエス・キリストを持っている者は神と分離できないので、罪を犯すことができないのです。キリストを持っていないければ、神を信じることはできません。

「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のことばは私たちのうちにありません。」（I ヨハネ 1:10）

この「罪」は複数形です。イエス・キリストを一度知った者は、キリストを否定するという罪を犯すことはできません。しかし、私たちはまだこの地上で死の体を持っているがゆえに死に感染した状態が続いており、罪の行為を犯してしまいます。このことを否定するのであれば、まだ神の御言葉がわかっていないということです。神のことばは検査キットのようなもので、私たちの罪をあぶりだしてくれます。それは私たちに治療を受けていやされてほしいからです。

日本語では、「罪」という言葉に違いがないため、「だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪を犯しません」（I ヨハネ 3:6）と「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは

神を偽り者とするのです」(Iヨハネ 1:10)では一見矛盾するように思えますが、ギリシャ語の原文では単数形と複数形に分けられているため、異なる罪について語っていることがわかりやすくなります。

■心配せずに罪を告白していやされなさい

聖書をギリシャ語で理解するとわかりやすくなるのは事実ですが、聖書の真理は変わりませんから、誰もがわかるように次のようにも記されています。

「だれでも兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば神はその人のために、死に至らない罪を犯している人々に、いのちをお与えになります。死に至る罪があります。この罪については、願うようには言いません。」(Iヨハネ 5:16)

「死に至らない罪」は行いの罪のことで、「死に至る罪」とはキリストを否定する罪のことです。原文でも前者は複数形、後者は単数形で表されています。

私たちは普段の生活の中で、怒ったりさばいたり嫉妬したり、いろいろな罪を犯しますが、そのような自分を見て自分はダメだと思う必要はありません。私たちが犯すことができるのは、死に至らない罪だけです。それは神の前に言い表して苦しみから解放されればよいのです。しかし、イエス・キリストとつながっていなければ、その人は肉体が朽ちるとそのまま滅んでしまいます。これが「死に至る罪」です。キリストを信じている者はもうこの罪を犯すことはできません。どんな罪を犯してもイエス・キリストを否定することはできないからです。

ヨハネの手紙第一はこのように、あなたは永遠のいのちを持っているから重荷を下ろしなさいと励ましているのですが、罪のことが理解できないまま日本語でここだけを読むとどうしても矛盾しているように思えて混乱してしまいます。そのために昔から、「赦される罪と赦されない罪がある」「ここまでの罪は赦されるけど、これ以上の罪は赦されない」「自殺した者は天国に行けない」などという読み方がされてきましたがそうではありません。

このように罪を行為でとらえてしまうといつのまにか律法に生きるようになってしまいます。神との分離から解放されて再結合し、イエス・キリストを信じて罪の根っこから解放されたのであれば、罪の行為はなくなるはずだ、なぜ私たちはいまだに罪の行為をするのだろうかという疑問から誤解が生じるわけです。

確かに私たちは神様と再結合し、イエス・キリストにとらえられて今は神の子どもです。しかし、死から完全に開放されているかというと、まだ死の体が残っています。霊のからだは着せられたので魂は霊のからだに守られて解放されています。しかし、死の体はまだ神との分離状態にあります。この体は朽ちる体で天国に持っていきません。そのため私たちは何が良いことで悪いことかわかっているのだけれど現実にはできないという問題にぶつかるのです。

その現実を見た時、なんと私はみじめな自分なのだろうかと思ってしまいますが、心配す

る必要はありません。私たちは贖われ、すでに神の子どもであり、霊のからだを着せられて永遠のいのちを持っているので、そういう状態にあっても罪に定められることはないからです。何があっても神から切り捨てられることはないのです。パウロはこの感謝を次のように述べています。

「私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」（ローマ 7:23-25）

私は神の律法にも仕えるし、肉では罪の律法に仕えるけど、キリストを持っているので罪に定められることはなく、神から切り離されることもないので、ただ神に感謝するとパウロは言っています。私たちも死の体ゆえに罪の律法に仕えていますが、そのことで苦しむ必要はなく、そのような罪はどんどん神に告白していやしてもらえばいいのです。神はあなたのすべてを受け止めてくださいますから、心配しないで罪を言い表しましょう。これを正確に伝えるために、罪を複数形と単数形に分けて表しているわけです。

神と再結合されている私たちはキリストを否定することはできませんから、罪を犯すことはできません。だから、罪に対して死んだということになります。ならば罪の行為を犯してもかまわないのかといえば、もちろんそんなことはありません。それは神の前に言い表して赦されていけばいいものです。イエス・キリストを信頼して自分の思いを隠さずに告白して赦され癒されていきましょう。